◆　八王子都税事務所長賞　◆

「税から選挙へ、そして政治へ」

青梅市立霞台中学校　３年　畑中　龍弥

今、魯迅の『故郷』を読んでいる。その中に、魯迅が少年時代に仲良く遊んだ旧友との再会の場面がある。作者の魯迅は、自分と旧友との過去と現在の境遇をくらべて、違和感を感じる。その原因はいくつかあり、そのひとつに重い税のことが描かれている。物語の背景に、重税に苦しむ旧友の姿が見てとれる。

そのように、税というと、「重い」、「高い」というイメージがつきまとう。しかし、本当に税は重いのでしょうか。そして、いったい税は何のためにあるのでしょうか。疑問がわきます。税には搾取され、人々がその重い税を納めるために苦しんできた歴史がある。だから、いまでもそのイメージが強く心に残っているのかもしれない。

しかし、現代は、たくさん収入のある人から税をたくさん納めてもらい、逆に生活に困っている人に分配するシステムに変わってきた。税がさまざまな人々の暮らしのバランスをとって、調整の役目をしていることがわかる。税は、世の中での富める者と貧しい者の格差を少しでも解消していく重要な役割を果たしている。だから、私たちは、しっかりと税を納め、社会での責任を果たさなければならない。また、生活に困っている人たちや、弱い立場にいる人たちを支えるシステムを作るために、税があるという認識を持つ必要がある。

そこで、納められた税の使われ方が問題になる。現代は、人々の要求が多様化していて、社会全体の要望も千差万別である。そして、税の使われ方は、政治に委ねられている。そのため、しっかりと世の中の動きに注視していく必要がある。

政治を行う人たちは、選挙で選ばれる。私たちは、税の使われ方を見極めるためにも、しっかりと政治を行う人を選挙で選ばなければならない。私たちひとりひとりが、政治に関心を持ち、政治に参加し、人々が公平で平等に暮らせる社会の実現をめざして、いつも注意深く見ていく必要がある。

トルストイの『アンナ・カレーニア』は、「幸福な家庭はみな似通っているが、不幸な家庭は不幸の相もさまざまである。」という有名な言葉で始まる。これは、祖父がよく話している言葉である。不幸な家庭のさまざまな姿を少しでも和らげていくために、税がもっともっといい方向で使われ、みんながもっともっと幸せに暮らせるように、税が適切に使われてほしい。

税を納めるということは、社会の一員として、果たすべき重要な義務である。その税を発端にして、選挙に目を向け、政治に関心を持ち、世の中を少しでもよい方向に変えていく意識をひとりひとりが持つことが大切である。